

「暗闇から主のあわれみを知らせる人へ」

マルコ5：1-20

平吹光太 24.5.26

前回の箇所はイエス様と弟子達が湖の反対側に舟で向かわれ、その道中に嵐に遭い、弟子達は不安でイエス様を起し、イエス様が嵐を静められるというお話。本日はその直後に起きたお話で、なぜイエス様がガリラヤ湖の東側に行こうとされたのかが分かる。それは一人の男性に会うため。本日はこの男の人に起こった出来事から、共に教えられてまいりましょう。

I. 汚れた霊にとりつかれた男

「こうして一行は、湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊につかれた人が、墓場から出て来てイエスを迎えた。この人は墓場に住みついていて、もはやだれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかった。彼はたびたび足かせと鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまい、だれにも彼を押さえることはできなかった。それで、夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていたのである。」(1-5)

ゲラサ人の地は異邦人の地。当時、ユダヤ人がガリラヤ湖の東側に行くことはほとんどなかった。それは異邦人の地であったから。聖書の中での異邦人とはユダヤ人以外の人達のこと。ユダヤ人は自分達だけが神に選ばれた特別な民だと言い、異邦人に関心を持っていなかった。しかしイエス様はこのゲラサ人の地にいる一人の男性の心の叫びを聞かれ、舟で反対側にある東側に彼に会いに行かれた。その男性は汚れた霊(悪霊)につかれた人で、沢山の悪霊にとりつかれていた。町の人々には追い出され、人里離れた墓場に住んでいた。人々はこの男性が変な事をしないように鎖で縛っていたが、彼は悪霊の力で鎖をひきちぎり、誰も彼を縛り押さえられなかった。この男性は体を押さえつけていた鎖をひきちぎる事はできたが、彼の心を縛っていた鎖(悪霊の支配)をひきちぎる事はできなかった。さらにこの男性は夜も昼も叫び続け、石で自分を傷つけていた。この男性は生きている意味が分からず、自分の命を絶とうという欲求にかられていた。悪霊は人を傷つけたり滅ぼしたりする機会を常に狙っている。私たちは私たちの心の中で起きている戦争を戦っている現実を目を背けてはいけない。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。」(エペソ 6:12-13) 聖書は常に私たちを滅ぼそうと狙っている悪魔の攻撃に目を覚ましていなさいと言っている。「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えかける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」(1ペテロ 5:8) 「身を慎み」とは、「しらふでいなさい、用心深くいなさい」という意味。「目を覚ましていなさい」とは、「警戒しなさい」という意味。つまり、用心深く、警戒していなければ、獅子(ライオン)が獲物を狙っているように、あなたは悪魔に食い尽くされると警告されている。私たちはそのような霊的な現実の中にある事を覚えて目を覚ましていなければならない。主によって救われている私たちは目を覚まし、みことば、信仰、祈りの武具によって悪魔の攻撃に勝利させて頂く。今日の箇所の男性はこのような獅子のような悪霊にとりつかれていた。自分ではどうすることもできない暗闇、絶望の中をもがき生きていた。町の人達は昼夜問わず聞こえてくるその男性の叫び悲鳴を聞いてもどうすることもできず耳を閉ざしていた。しかしその叫びを聞かれているお方がいた。それがイエス・キリスト。

II. 絶対的権威者である主イエス・キリスト

6~13節はイエス様と男性にとりついていた悪霊が話している場面。8節で舟からあがられたイエス様はすでに「汚れた霊よ、この人から出ていけ」(8)と命令されていたので、6節で

「彼は遠くからイエスを見つけ、走って来て拝した。そして大声で叫んで言った。『いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。神によってお願いします。私を苦しめないでください。』」(6-7)と言った。ここにイエス様と悪霊の歴然とした力関係が表されている。私たちはよく神と悪魔が対等の力がある映画などを目にするかもしれない。しかしそれは人間が作った想像であり、全く聖書的ではない。神は全被造物の創造者であり、悪魔(元々御使いの一人であったが神に仕える立場に満足せず、神のようになろうとし墮落した)、悪霊は神の被造物。そのためイエス様に勝つ見込みは全くない存在。

そしてイエス様はどれ程の悪霊がこの男性にとりついているのかを示すために悪霊に名前を尋ねた。彼は「私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから」(9)と言った。レギオンという名は、ローマ軍隊用語で、5~6千人の数の軍隊のこと。異常な数の悪霊が一人の男性にとりついていた。悪霊はイエス様

に「自分たちをこの地方から追い出さないでください、と懇願した。ところで、その山腹では、おびただしい豚の群れが飼われていた。彼らはイエスに懇願して言った。『私たちが豚に入れるように、豚の中に送ってください。』」(10-12)と言った。そして「イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。」(13)とあります。なぜイエス様が悪霊を豚にとりつかせたのかの理由についてははっきりとは分かりませんが、恐らく、この男性がどれ程多くの悪霊にとりつかれていたのか、またイエス様の許可なしには悪霊は何もできないという権力の違いを弟子達や町の人達に見える形で示すために、イエス様は5、6千程の悪霊を豚2千匹に乗り移らせた。絶対的権威者であるイエス様が共におられるなら悪霊を恐れる必要はない。

III. 暗闇から主のあわれみを伝える人へ

「豚を飼っていた人たちは逃げ出して、町や里でこのことを伝えた。人々は、何が起こったのを見ようとやって来た。そしてイエスのところに来ると、悪霊につかれていた人、すなわち、レギオンを宿していた人が服を着て、正気に返って座っているのを見て、恐ろしくなった。見ていた人たちは、悪霊につかれていた人に起こったことや豚のことを、人々に詳しく話して聞かせた。すると人々はイエスに、この地方から出て行ってほしいと懇願した。」(14-17)

服を着たとあるが悪霊にとりつかれている時の男性は裸であった。これは悪霊がこの男性の恥を見せびらかしていた。町の人達はイエス様を迎えなかった。恐らく、彼らの経済を支えていた豚2千匹が死んでしまったため。彼らは悪霊にとりつかれ苦しんでいた男性よりも豚の方が大切。人の命よりも自分達の財産が大切。彼らは神を畏れる人達ではない。イエス様は何よりも人の命を大切にされる。しかし、人がイエス様を拒むならイエス様は離れてしまわれる。

「イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供させてほしいとイエスに願った。しかし、イエスはお許しにならず、彼にこう言われた。『あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。』それで彼は立ち去り、イエスが自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた。」(18-20)

この男性はイエス様にお供させてほしいと願うがイエス様はこの男性に自分の家、家族のところに帰り、どんなに素晴らしいことを神が成してくださったかを皆に知らせないと言われた。12弟子達のように牧師や宣教師等の直接献身に導かれる人と、この男性のように主に献身をしても世の職業を持ちながら、遣わされている家庭、学校、職場で主にお仕えする人達がいるということはこの箇所は述べている。

そして彼は暗闇の中をさまよい苦しんでいた自分にイエス様がどれほど大きなことをしてくださったかをデカポリス地方(十の都市)の人々に言い広めた(原語では福音を宣教するという意味)。彼は救いの喜び福音を多くの人達に宣べ伝える者へと変えられた。

- 結： 1. 悪霊は常に私たちが神から引き離そうとする。そのため私たちは目を覚ましている事が大切。悪霊は人間の尊厳を破壊しようとする。悪霊の策略は、私たちのうちにある神のイメージをねじ曲げ、神から人間を引き離し、私たちの存在価値、喜びを人から奪おうとすること。その悪霊の力に打ち勝つには主のみことばと、主イエスを信じる信仰に堅く立ち、兄弟姉妹と互いに祈り支え合うこと。
2. この箇所の男性のように暗闇の生活をしている人が今日ここにいるかもしれない。実際に体に鎖を繋がれているわけではないが心に虚しさ、不自由さ、絶望感を抱えて生きている人が居られるかもしれない。イエス様はあなたを愛しておられる。あなたのためにイエス様は十字架にかかれ、復活された。その御業によって、打ち破ること赦すことのできない暗闇、罪はありません。あなたのその暗闇の心に光を照らすことを主は願っておられる。
3. イエス様に出会った人には新しい人生が始まる。イエス様を知らない人々にイエス・キリストの福音を伝える者とされる。イエス様の福音によって深い暗闇から救われたこと、どんなに素晴らしいことを神がしてくださったのかを言い広めようではありませんか。主は私たち一人ひとりをお愛する家族、友人、知人の中で主の愛と光を放つ者としておられることを覚え、愛を示しつつ述べ伝えていく者でありたい。